

第2回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム

ERINA 経済交流部・調査研究部研究員 穆堯芋

2011年8月、筆者は「第2回中・日・韓・朝言語文化比較研究国際シンポジウム」に参加するために、中国吉林省の延辺朝鮮族自治州（以下延辺州、州都延吉市）を訪れた。延辺州は中国朝鮮族が集中して居住している地域で、全国唯一指定された朝鮮族自治州である。ロシア、北朝鮮と国境を接しており、日本海にも近いという地理的条件に恵まれ、中国語、ハングル、日本語、ロシア語の教育研究が盛んに行われている。また、北東アジアの国際経済協力において重要な地域である。

国際シンポジウムは8月22日から25日にかけて延辺大学で開催された。文学、言語、教育分野の議論が中心であったが、社会、経済、歴史の分科会も設けられ、数多くの発表が行われた。日本、韓国、中国から約230名の専門家が参加し、18の分科会に分かれて議論した。開会挨拶、基調講演、研究発表などすべて日本語で行われたことは特徴である。中国全土から日本研究を携わる専門家が集まり、北京大学、南開大学、吉林大学など中国著名な日本研究拠点

のほか、香港、海南、武漢、河南、内モンゴル、寧夏など中国の南部・中西部からの参加もあり、質の高い研究発表が行われた。

筆者は経済分科会に日本の地方企業における中国進出の実態について報告した。新潟県の事例を通じて、地方企業の中国進出の課題を提示し、それに相応する政策提言を行った。寧夏大学の蔵志勇研究員は中小企業支援制度における日中比較研究を行い、西部大開発を念頭に入れた支援政策の策定について発表した。延辺州は国境地域に立地する少数民族の自治州であるゆえに、西部大開発の対象地域として指定されている。華東政法大学の張浩帆研究員は日系企業における中国進出の現地化について報告し、進出事例を挙げながら現地化の進展を紹介した。ほかに農業政策の日中比較などの発表があった。報告者の人数は多くなかったが、活発な議論が行われた。

全体の感想として、各分科会の開催時間が集中しすぎて、より多くの研究発表を聞くことができなかったことが残念

写真1 シンポジウムの開幕式



筆者撮影

写真2 開幕式の場内の様子



筆者撮影

である。しかし、中国における日本研究の代表的な研究者が集まり、様々の分野においてレベルの高い研究発表が行われた。また、経済分科会に、西部大開発や外資誘致など中国経済全般に関わる問題が国境都市の延吉で議論されたことは意外であった。延辺州は北東アジア国際協力の重要

な地域であると同時に、中国国内においても認知度が高まりつつある。今回の訪問を通じて、国境地域の延辺州は民族的な特性を活かして中国全体の発展ペースに乗ろうとしていることが窺えた。